

目 次

第 25 回年次大会参加申し込み等について	1
2008 年度第 2 回理事会報告	7
第 14 回公開講演会「イスラームから多文化共生を考える」報告	8
日本中東学会年報編集委員会報告	12
韓国中東学会に参加して	14
地域研究学会連絡協議会 2008 年総会報告	16
近代史家ラウフ・アッバースの逝去を悼む	18
連絡先をご存じないですか	20
会員の異動	20
寄贈図書	23
事務局より	24
編集後記	25

第 25 回年次大会参加申し込み等について

1. 参加および懇親会申し込みについて

日本中東学会第 25 回年次大会への参加申し込みは、参加費の振込みによって行うことができます。

『ニューズレター』本号に、大会への出欠通知、懇親会・弁当(昼食)の申し込みを兼ねた郵便振替用紙が同封されています。大会に参加される方は、この振替用紙をご利

用の上、下記の口座に、4月10日(金)までに参加費をお支払いください(研究発表に応募された方の参加費納入期限は、後述のとおり、これより早く2月末日です)。

また、懇親会費、2日目の弁当などの納入も同封の振替用紙をご利用ください。2日目の会場となる広島市立大学の周辺には、食堂がほとんどありませんのでご注意ください。なお、弁当の当日申し込みはお受けできません。諸費用はできる限り前納でお願い申し上げます。

参加費は1,000円、懇親会費は5,000円(学生会員は4,000円)、2日目弁当代は1,000円です。なお、事前にお振込みいただいた諸費用の返却には応じかねますので、ご注意ください。

振込先(郵便振替口座)

口座番号 01390-8-47526

口座名称 日本中東学会第25回年次大会実行委員会
(ニューズレター同封の振替用紙をご利用ください。)

2. 託児所の設置について

託児所利用の希望は、引き続き受け付けております。大会当日に託児所の利用を希望される方がございましたら、準備の都合上、早めにご連絡ください。最終的な締め切りは2009年4月10日(金)の予定です。

託児所の費用については、託児所会計の前年度からの繰越金を充当する予定ですが、利用者の方に利用時間に応じて多少のご負担をお願いいたします。

3. 研究発表について

2日目の研究発表につきましては、45件の応募がありました。多数のご応募をいただき、誠にありがとうございます。

実行委員会では大会の暫定プログラムを作りました。ただし、今後発表予定者の都合などによる変更の可能性があります。よろしくご了解ください。

最終的なプログラム、会場近郊のホテル案内、会場への交通案内、総会議決の委任状などは3月下旬にお手元にお届けする予定です。

4. 日本中東学会第25回年次大会暫定プログラム

2009年5月16日(土) 広島国際会議場 (<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/icch/>)

13:30~16:45 公開シンポジウム「暴力と平和を考える——ヒロシマの視点から」
パネリスト

- 田城明(中国新聞社)
- 中坂恵美子(広島大学大学院社会科学研究所)
- 浅井基文(広島市立大学広島平和研究所)

17:00～18:00 日本中東学会総会・日本中東学会奨励賞授賞式

18:15～20:15 懇親会

2009年5月17日(日) 広島市立大学(<http://www.hiroshima-cu.ac.jp/>)

研究発表

第1部会

9:30～10:10 近藤信彰(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
「19世紀後半テヘランのシャリーア法廷台帳」

10:10～10:50 秋葉淳(千葉大学)
「1845年の地方代表者会議——タンズィマート期オスマン帝国の実験」

11:00～11:40 齊藤優子(立教大学大学院)
「19世紀オスマン帝国における近代化と西欧化——ルメリ鉄道建設を事例として」(仮題)

11:40～12:20 千條真理子(明治大学大学院)
「イスラーム学術委員会に関する一考察」

13:20～14:00 平野淳一(京都大学大学院)
「近代イスラーム改革主義者とパン・イスラーム主義——ムハンマド・アブドゥとラシード・リダーのスナ派/シーア派関係論」

14:00～14:40 高岩伸任(一橋大学大学院)
「ワクフと英信託制度の比較研究」

15:00～15:40 渡邊祥子(東京大学大学院)
「1940～50年代ムスリム・スカウト運動に見るアルジェリアのナショナリズムとイスラーム主義」

15:40～16:20 若桑遼(上智大学大学院)
「独立前チュニジアにおけるウラマーの国家観——ザイトゥーナ誌の分析から」

16:20～17:00 佐藤尚平(St Antony's College, University of Oxford)
「アラブ首長国連邦、バハレーン、カタールの完全独立と英国の撤退」

第2部会

10:10～10:50 辻明日香(東京大学大学院)
「コプト聖人バルスーマーと14世紀エジプト社会」

11:00～11:40 篠田知暁(京都大学大学院)
「ワッタース朝期モロッコ北部農村における王権と聖性」

11:40～12:20 菅瀬晶子(総合研究大学院大学)
「パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬」

13:20～14:00 役重善洋(京都大学大学院)
「内村鑑三および矢内原忠雄におけるキリスト教シオニズム」

14:00～14:40 Aleksandra Majstorac Kobiljski (City University of New York)

“From Beirut to Kyoto: Travels and Trials of an Educational Model”

15:00～15:40 ナグラ・ハフィズ(Naglaa Fathy Hafez) (東京大学)

「寺山修司と唐十郎による中東世界のイメージ形成及び日本社会の描写——『千夜一夜物語』をケーススタディーとして」

15:40～16:20 小村明子(上智大学大学院)

「日本のイスラーム——『アッサラーム』誌からみる終戦以降の日本のイスラーム」(仮題)

第3部会

10:10～10:50 鷺見朗子(京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典(名古屋工業大学)

「アラビア語学習者におけるアラブ文化への興味と習得内容」

11:00～11:40 アルモーメン・アブドーラ(Abdalla El-Moamen) (大東文化大学)

「日本語とアラビア語の「死」に於ける概念構造——慣用的メタファー表現に見る比喩の特性」

11:40～12:20 細谷幸子(東邦大学)

「現代イランの移植医療とイスラーム」

13:20～14:00 小島宏(早稲田大学)

「マレーシア人ムスリム元留学生の滞日中の宗教実践」

14:00～14:40 石川真作(京都文教大学)

「オーストリアにおけるイスラームを巡る状況に関して——歴史的環境と現状」

15:00～15:40 椿原敦子(大阪大学大学院)

「ロサンゼルスにおけるイラン系ムスリム組織の出現——イラン系イスラミックセンターにおける参与観察を中心に」

第4部会

9:30～10:10 鳥山純子(お茶の水女子大学大学院)

「現代エジプトにおける女性教師の商品化——教育の民営化と社会階級指標化の一側面」(仮題)

10:10～10:50 Humayun Kabir(広島大学大学院)

“Marginalized *‘ulama* and the Emerging *Madrassa* Schooling in Bangladesh: The Case of Brahmanbaria Municipality”

11:00～11:40 杉山佳子(上智大学アジア文化研究所)

「ルイ・マシュエルとチュニジア教育改革(1883-1908年)」

11:40～12:20 黒田賢治(京都大学大学院)

「現代イランにおける中堅法学者の台頭——コム・ハウザ講師組合(JMHEQ)の組織構造と運営実態をめぐって」

13:20～14:00 相島葉月 (St Antony's College, University of Oxford)

「現代エジプトのイスラーム的知の生産における独自性の位置づけ——アブドゥルハリーム・マフムードのハディース講釈に見られる創造性と様式美」

14:00～14:40 浜本一典 (同志社大学大学院)

「イスラームの法原則——研究の歴史と現状と課題」

15:00～15:40 宮下 遼 (東京大学大学院)

「『描写の書』に見るオスマン朝詩人の人間観察——ファキーリーを中心に」

15:40～16:20 田熊友加里 (日本女子大学大学院)

「近代ヨーロッパにおける『ペルシア絨毯』の受容——個人的愛好から大衆鑑賞への広がり」

16:20～17:00 飯野りさ (国立民族学博物館)

「東アラブ音楽文化圏における音楽理論と近代——1932年アラブ音楽会議を中心に」

第5部会

10:10～10:50 長岡慎介 (京都大学大学院)

「近代イスラーム経済学の形成と現代イスラーム金融」

11:00～11:40 堀抜功二 (京都大学大学院)

「ドバイ首長国におけるグローバル化戦略と行政改革」

11:40～12:20 清水 学 (帝京大学)

「世界同時不況と中東諸国の対応」(仮題)

13:20～14:00 関口陽子 (東京大学大学院)

「現代トルコの政治エリート」(仮題)

14:00～14:40 岩坂将充 (上智大学アジア文化研究所)

「トルコにおける政軍関係の歴史的展開——政軍関係研究の視点からの再検討」

15:00～15:40 荒井康一 (上智大学アジア文化研究所)

「現代トルコ農村社会における資源利用と投票行動——南東アナトリア開発計画(GAP)の事例から」

15:40～16:20 若松大樹 (上智大学大学院)

「クルド系アレヴィーの人々の民族帰属に関する一考察——東部アナトリアムシュ県における事例を中心に」

第6部会

10:10～10:50 佐藤秀信 (法務省)

「イラン・ハーメネイ体制期(1989-2008年)における軍の社会介入」

11:00～11:40 金谷美紗 (上智大学大学院)

「グローバリゼーションで深化する権威主義体制——エジプトにおけるレジームと企業家層の関係に注目して」

- 11:40～12:20 横田貴之((財)日本国際問題研究所)
「現代エジプトにおける権威主義体制とイスラーム運動——ムスリム同胞団の合法政党化に関する一考察」
- 13:20～14:00 平松亜衣子(京都大学大学院)
「現代クウェートにおけるイスラームと民主化——市民社会の形成と女性の政治参加を事例に」
- 14:00～14:40 錦田愛子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
「レバノン内戦後のパレスチナ難民——政治的位置づけの変化と法的地位」
(仮題)
- 15:00～15:40 溝渕正季(上智大学大学院)
「抵抗運動と社会活動の接続点——レバノン・ヒズブッラーの「抵抗社会」の分析を中心に」
- 15:40～16:20 小林和香子(早稲田大学大学院)
「イスラエル・パレスチナ間の平和構築の取組みとしての People-to-People プログラムの現状と課題」

5. 研究発表予定者の方へ

発表予定者の方は、2 月末日までに、(1)参加費の振込みと(2)発表要旨原稿の提出をお願いいたします。期日までにこの二つの条件が満たされない場合は、発表をお断りすることがありますのでご注意ください。

海外在住などのために参加費の振込みに困難が生じる方は、別途ご相談ください。

なお、2 月末日までに、学会への入会手続を完了し、2009 年度までの会費を納入していることも、発表資格条件の一部として定められております。期日までにこの条件が満たされない場合は、発表をお断りすることがありますのでご注意ください。

【発表要旨執筆要項】

1. 要旨は大会当日配布される要旨集に掲載します。
2. 分量は、和文 1,000 字、英文 350 words 以内とします。
3. 日本語の発表には必ず英文要旨(350 words 以内)もつけてください。
4. 和文、英文とも題名、名前、所属、要旨本文の順序で書いてください。ただし、所属の書き方等、書式は統一性を保つため、こちらで編集する場合があります。フォント、行数等についてもこちらで決定します。
5. 英文のブラッシュアップ、ネイティヴ・チェックは大会実行委員会では行いません(簡単なスペルミス等を除く)。各自の責任で行ってください。
6. アラビア語転写などで特殊文字は用いないでください。
7. 書式なし(シンプル・テキスト)のファイルで、e-mail に添付して、大会事務局アドレス(james2009@am25.intl.hiroshima-cu.ac.jp)に 2 月末日までにご送付ください。

8. もしプロジェクター利用について変更がありましたら、あわせてお知らせください。

連絡先

日本中東学会第 25 回年次大会実行委員会事務局

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東 1-1-1 広島修道大学 堀井優研究室

TEL: 082-830-1226 FAX: 082-848-2765 (共用)

E-mail: james2009@am25.intl.hiroshima-cu.ac.jp

* 可能な限りメールでご連絡・お問い合わせいただければ幸いです。

(日本中東学会第 25 回大会実行委員会事務局)

2008 年度第 2 回理事会報告

日時： 2008 年 11 月 14 日(金) 17:30～19:30

場所： 上智大学 2 号館 2-630a 会議室

出席： 私市正年会長、赤堀雅幸事務局長、青山弘之、飯塚正人、大稔哲也、酒井啓子、桜井啓子、山岸智子、山口昭彦の各理事

欠席： 加藤博、栗田禎子、黒木英充、東長靖、羽田正、林佳世子の各理事(委任ずみ)、大塚和夫理事

【報告事項】

1. AJAMES 編集委員長報告(山口) → 12～14 ページの記事もご覧ください。
 - ・ AJAMES 24-1 号は予定より遅れたが完成し、24-2 号については順調に作業中。
 - ・ 平成 21 年度科学研究費補助金科学研究費補助金の申請を行った。
2. 財務担当理事報告(飯塚)
 - ・ 常勤職のない正会員のための会費設定について検討中。
 - ・ 会費の銀行口座引き落としが可能か、その他の支払い方法を含め調査中。
3. 第 14 回公開講演会報告(桜井)
省略 → 8～12 ページをご覧ください。
4. 第 15 回公開講演会企画報告(赤堀)
 - ・ 2009 年 10 月 24 日、札幌にて「中東と中央ユーラシア——資源、民族問題、イスラーム」と題して開催の予定で、平成 21 年度科学研究費補助金の申請を行った。
5. 地域研究学会連絡協議会関連報告(大稔)
 - ・ 日本学術振興会カイロおよびナイロビ研究連絡センターの存続について、参加学会の要望書を取りまとめて 2008 年 6 月に関係各方面に送付した。
6. ニュースレター担当理事報告(山岸)
 - ・ 113、114 号を発行。

- ・役員選挙と年次大会の都合に合わせて 115、116 号を発行の予定。
7. 研究文献データベース担当理事報告(飯塚)
 - ・東洋文庫との間で今年度分の契約を取り交わした。
 - ・作業は順調に進行中。
 8. 国際交流担当理事報告(酒井) → 前号(115号)4～13 ページもご覧ください。
 - ・アジア中東学会連合(AFMA)のウェブサイトを立ち上げた。
 - ・第3回中東研究世界大会(WOCMES 3)は、2010年7月バルセロナで開催予定との通知があった。
 9. その他(赤堀・飯塚)
 - ・11月8日、国立民族学博物館で開催された地域研究コンソーシアム年次集會に飯塚理事が出席した。また、学会活動のポスター展示を行った。

【審議事項】

1. AJAMES 投稿規程の改正(山口)
 - ・非会員の投稿を一定の規則の下に認めることを了承した。
2. 役員選挙の実施について(赤堀)
 - ・2009～2010年度役員選挙(第13期)の実施時期を了承した。
 - ・選挙管理委員の構成を検討し、交渉の上指名することとした。
3. 入退会手続きについて(赤堀)
 - ・入退会手続きの細部について、事務局長提案を修正して了承した。
4. WOCMES 評議員の推薦について(私市)
 - ・現在の評議員が個人として推薦するものであるため、学会は現在の評議員に複数名を推薦することとして、被推薦者を選出した。
5. 第26回年次大会(2010年度)開催について(私市)
 - ・開催を担当する大学ないし機関について、会長が打診を行うことを了解した。
6. 名誉会員について(私市)
 - ・名誉会員の資格を設ける方向で審議を継続することとした。
7. AFMA について(酒井)
 - ・韓国中東学会(KAMES)およびモンゴル中東学会(MAMES)提案による AFMA 大会の毎年開催およびロシア中東学会(RAMES)の加入について、事態の推移を見守りつつ適宜理事会、総会に諮ることとした。(赤堀雅幸)

第14回公開講演会「イスラームから多文化共生を考える」報告

2008年10月25日、土曜日 午後13時30分から17時30分まで、神戸国際会館の一室を借りて、第14回公開講演会を開催した。今回の講演会では、日本において、さまざまな立場から、イスラームと向き合ってきた方々、あるいは、そうし

た方々について研究してこられた方を講師・パネリストにお迎えして、それぞれの立場からイスラームとの関わりについてご講演いただいた。基調講演(森本公誠氏：仏教からみたイスラーム——イスラーム史を学んで)とパネル・ディスカッション(店田廣文氏：外国人イスラーム教徒——アンケート調査の結果から)、(貞好康志氏：イスラームと日本社会——イスラーム教徒の視点から)(河田尚子氏：イスラームと女性——日本人イスラーム教徒の視点から)を通じて、イスラームと日本文化の関わりや両者の相違、それに日本社会の特徴が浮き彫りになったと思う。

遠い世界の話ではなく、イスラームを身近な事柄として取り上げたことや会場に選んだ神戸国際会館が、神戸三宮駅から3分という立地条件だったこともあり、70名あまりの参加者を得ることができた。参加者の多くは、関西圏の大学生や大学院生、それに教職関係の方が大半を占めたが、関東や九州から参加してくださった方もいた。質疑応答時間には、講師・パネリストの方々全員が、会場からの質問に答えるかたちで参加者と対話をしてくださった。

また参加者のうち34名の方がアンケートに記入してくださった。講演会開催情報の入手先は、ポスターやチラシが26%、授業での紹介32%、先生や友人の紹介20%、学会のホームページ5%であった。

参加者からは、「森本氏による仏教とイスラームの違いについての説明やムスリムが仏教に対して抱いている疑問点の紹介が興味深かった」、「店田氏によるデータに基づく現状紹介が実態把握に役立った」、「日本人イスラーム教徒の生の声を聞くことができ、イスラームとの共存は、身近でかつ具体的な課題であることを実感することができた」などの感想が寄せされた。ただ、時間的な制約もあり、各講演者の話を十分に聞くことができず残念であった、「多文化共生を考える」というタイトルにもかかわらず、実態はともかくも、どうすれば「多文化共生」を実現できるのかについての提言がなかったといった批判もあった。(桜井啓子)

相互理解から《共生》への課題を見出す

10月25日神戸国際会館にて、第14回公開講演会「イスラームから多文化共生を考える」は開催された。神戸といえば、1935年に日本初のモスクが誕生した場所でもあり今回の講演会にふさわしい場所であった。

現在10万人近いムスリムが、日本に居住しているといわれ、全国各地にモスクも誕生している。ムスリムによる制度形成は、ここ20年程の間に急速に展開し、日々そのプレゼンスは高まっている。そしてそれと呼応するように、生活に根ざした問題群がムスリム、研究者らにより提出されてきた。教育・墓地・その他日本の社会制度とのかかわり等など、今後乗り越えなければならない課題は多い。そして、ことムスリムについていうと、今回の報告にもあったように、マイノリティとしての生は、

自力での手厚い制度形成や、個人による問題解決に委ねられている面が大きい。さらに、イスラームあるいはムスリムと、日本の社会構造はどのような関係性にあり、どのような問題が起きているのか、イスラームはどのような認識で以て日本社会を眼差しているのか、このような問いは未だ一般に広く認知されているとは言い難い。そのような中であって今回の講演会は、様々な切り口から、イスラームと「多文化共生」を眼差すものであった。さて、さっそくその内容を簡単に振り返ってみよう。

基調講演は、「仏教からみたイスラーム——イスラーム史を学んで」と題された、森本公誠氏による報告であった。森本氏は、「世界宗教」として括られる二つの宗教（イスラームと仏教）双方について比較を行った。双方の宗教を、世界宗教の中に括ってはあるものの、「異質な宗教」である部分を多分に含んでいるとし、「それを機械的に横に並べて比較することは慎まねばならない」として比較の困難さを認めながらも、その成立過程と宗教としての体系等について丹念に読み説いた上で双方の思想的特性を示し、対比のみならず「文明間対話」の可能性とその実践の事例をご自身の経験を交えて提示した。

また、上記の作業を経たうえで、双方の宗教の「特性（イスラーム：タウヒードという世界観、シャリーアという独自の法、ウンマという固有の共同体観の三極構造／仏教：慈悲のこころ、空の思想、法界縁起の世界観の三極円構造）」について述べたのち、それぞれの宗教の特性に基づく思考様式において、相互理解を実践するうえで今後求められる方向性を提示した。そこでは、自己と他者を認識しつつ、「お互いがお互いを学習」することの重要性が説かれ、「多文化共生」を実践していく上での相互理解の必要性が提起された。

次いで、パネル・ディスカッションが行われ、まず報告者から 30 分程度の報告が行われた。それぞれの報告者により、日本社会とイスラームの関係性と問題点が、具体的事例に基づいて提示された。

第 1 報告は、店田廣文氏の報告であった。早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室が実施した一連の質問紙を用いたアンケート調査の調査結果を用い報告が行われた。紹介された主な項目は、生活満足度、主観的適応観、友人数をベースとしたサポート・ネットワーク、宗教的行為の実践状況、世帯の経済状況、日本に暮らすうえでの悩み・不安等に係る項目群であった。その結果、本調査結果からは、「全体としては高い生活満足度と社会的適応観」、「日本人との良好な友人関係とサポート関係」の存在、「社会経済的活動の活性化とネットワークの形成」状況等が示唆された。本報告では、上記の調査結果にくわえ、日本に居住するムスリムによる活発な制度形成の状況と今後の問題点も紹介された。着実に地域社会において成熟しつつある、ムスリム・コミュニティについての認識を深め、相互交流を実践することの重要性に加え、定住化・永住化、家族形成等、現在進行形で生起している状況を念頭に置きつつ、教育問題、墓地問題などをどのように解決していくか、その解の探索が今

後日本社会およびムスリム双方に求められるとの課題提起がなされた。

第2報告は貞好康志氏による報告であった。「イスラームと日本社会——イスラーム教徒の視点から」と題された本報告は、ご自身もムスリムである氏の体験した事柄などを踏まえつつ、規範の実践や教育問題などについて生きた事例の紹介がなされると共に、イスラームと日本社会における「多文化共生」のありかたを問い直すものであった。イスラームの普遍的価値体系としての理解、あるいは自発的改宗・婚姻・家族形成等に伴う日本人ムスリムの増加等を鑑みるに、イスラームと日本社会の関係性は、単に外国人ムスリムと日本社会という問題に還元できない問題を含んでいるとの指摘がなされた。この指摘は、「多文化共生」という言葉が、ともすれば固定的に想定しやすい外国人と日本社会という枠組みへ留意を促すものであった。その上で、先に挙げたムスリム特有のニーズと課題(1. 祈りの場と時間、2. 食の「安心」、3. 信仰に由来する行事(断食や祭日)への理解、4. 子供たちの学校生活や教育上の配慮(イスラーム的価値の日本での継承)、5. イスラーム墓地の許容)について説明がなされ、日本社会の枠組みの範囲で捉えられる問題群に関しては、絶対少数のマイノリティであるムスリム側の努力以上に、今後日本社会側の役割が、どのような「多文化社会」を設計し築いていくのかという課題と併せて重要であるとの指摘がなされた。その上で、今後必要となる「多文化社会」の方向性に関する議論以前に「日本のホスト社会」の有り様が重要であり、「人間同士のつながりの復興」、「コミュニティの再生」が望まれるとの表明がなされた。

第3報告は、河田尚子氏による報告であった。貞好氏に続き、河田氏もまたご自身がムスリマであり、実体験を交えながら「イスラームと女性——日本人イスラーム教徒の視点から」と題された報告が行われた。まず、「多文化共生」とは何かという点について、その概念がイスラームはもとより、異文化を想起する際、「外国人」という一つのカテゴリとセットの概念として捉えられがちな傾向がある点、及び「多文化共生」が単なる異文化の消費のみに帰結する概念ではないという点が指摘された。こうした点について、改宗を機に、日本文化に加えイスラーム文化の中でも暮らしているという、「自分自身の中で『多文化共生』している」体験を例にあげつつ説明が行われた。本報告では、そのような内なる共生を経験する自己の体験を随所に踏まえながら、1.「日本文化」に暮らす日本人の価値意識への問い直しを行いつつ、「多文化共生」を考える上でのイスラームと女性の関係性についての問題提起と考察、および2.日本人ムスリマが直面する問題についての報告がなされた。

一つ目の議論では、日本社会のメディアにおける身体消費の状況や、セクシュアリティへの認識、さらには女性自身による自己の認識の事例などについて例をあげて説明されたのち、はたしてイスラームの価値・規範構造からは、現在の日本社会で確認できる女性を巡る状況は、どのように眼差されているのかが検討された。次いで二つ目の議論では、現在、とりわけ「日本人ムスリマ」に顕著な問題が、発

生しているとの報告がなされ、教育問題が取り上げられた。そこでは、日本人ムスリムによる家庭でのイスラーム教育の困難さや、海外への移住の問題が取り扱われた。これらの問題は、現在日本において「確固とした」ムスリム・コミュニティが形成されにくい要因ともなっていると、解決が急務であるとの指摘がなされた。まとめでは、「イスラーム文化も日本文化の中に花として根付きつつある」という片倉もとこ氏の議論を引用しつつ、上記のような問題を未だ抱えてはいるが、今後日本社会における「多文化共生」議論のさらなる進展が望まれるとの提言がなされた。

以上、簡単に、各報告について概観したが、最後に若干の所感を記しておきたい。まず、「多文化共生」をテーマにした今回の会合は、自己と他者双方の認識を改めて問い直すものであった。今回の講演会では、相互理解の必要性が理念的に提示されるとともに、日本におけるイスラームの実態について、個々の瑞々しい事例が紹介され、相互理解に不可欠な実態や問題の把握、自己の問い直しの必要性も同時に喚起された点で意義深い。

なんとすれば、その切り口は多様であったが、各テーマは、イスラーム、ムスリムとは何か、という問いにパネリストが各々の観点から迫るだけでなく、ひいては、我々自身の価値体系やアイデンティティ、社会構造を問い直すものとして理解できるからである。ただし、その問題領域は、日本の制度条件に係るものから、アイデンティティに係るものまでさまざまであり、「共生」の概念についても捉えられ方は一様ではない。改めて、詳細な検討が必要な様々な課題が浮かび上がったといえるが、各々の問題領域を捨象することなく、(多様性をその内に包含する)日本の「イスラーム」を変数として組み込んだ「共生」の在り様とは、どのようなものか今後検討していく必要があるだろう。換言すれば、今後は、報告及び総合討議においても示唆されたように、「共生」概念の精緻化と、それを経たうえでの個々の問題領域における概念の適用可能性の検討が目下の課題となろう。それには、今回提出されたような事例のような実態把握の深化にくわえ、日本の社会構造の再検討、相互理解の喚起が不可欠であると考えられる。畢竟、今回の講演会で提示された「共生」をめぐる議論は、一方で未だ理念的ではあるけれども、主体間の関係性の変容のプロセスを具体的なレベルにまで落としこめる可能性もまた示唆したのではないかと感じた次第である。

(岡井宏文)

日本中東学会年報編集委員会報告 —非会員も投稿できるようになりました—

1. 25-1号への投稿を締め切りました。

去る12月20日に25-1号への投稿を締め切りました。論文17本、研究ノート2本、書評4本、学界動向1本の投稿をいただきました。うち9本が、外国語による投

稿でした。『日本中東学会年報』の国際化のため、今後とも外国語での投稿をお待ちしています。25-1号の刊行は6月を予定しています。

2. 24-2号の刊行準備

24-2号の刊行は2008年12月を予定しておりましたが、諸般の事情により年を越してしまいました。2月中にはお手元に届けられるよう鋭意作業を進めておりますので、どうかしばらくお待ちください。24-2号には、論文4本、書評1本が掲載される予定です。

3. 25-2号投稿締め切りのお知らせ

25-2号(2009年12月刊行予定)の投稿締め切りは、6月20日です。論文、研究ノート、書評の投稿、博士論文要旨の寄稿など、お待ちしております。そのほか、英文による特集の企画がありましたら、ぜひお寄せください。

4. 非学会員の投稿について

編集委員会では、AJAMESのさらなる国際化を図るために、一定の条件の下に非学会員にも投稿を認めることを検討し、先の理事会において承認されました。

以下の条文をあらたに「『日本中東学会年報』投稿規程」に盛り込むことになりました。

9.1) 以下の条件を満たす非学会員にも投稿を認めます。

- a) 国外に在住するか、あるいは外国籍をもつこと。
- b) これまで『日本中東学会年報』に論文や研究ノートを発表したことがないこと。

9.2) 投稿原稿の掲載決定後、直ちに掲載料として5000円を日本中東学会に支払っていただきます。(投稿原稿が不採用となった場合は、この限りではありません。)

9.3) AFMA (Asian Federation of Middle East Studies Associations) 構成学会の会員は、上記9.1)の条件を満たすことなく投稿できます。また、投稿原稿が採用となった場合、9.2)に規定した掲載料を支払う必要はありません。

9.4) 非学会員による投稿は、原則として英語によるものとします。

会員の皆様には、関心のありそうな外国人の研究者などに、この制度をお知らせいただければ幸いです。

5. 「『日本中東学会年報』投稿規程」の改正

上記の通り、非学会員にも一定の条件の下に投稿を認めることになりましたので、投稿規程を和文・英文ともに改正しました。また、この他、一部、字句の修正なども行っております。次号24-2号巻末およびホームページでご確認ください。

6. 編集委員会への連絡先の変更予定(2009年4月以降)

4月より投稿先・連絡先が次ページの通りに変更となります。

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学外国語学部 青山弘之研究室気付
『日本中東学会年報』編集委員会

なお、メール・アドレスには変更はありません。

ajames-editor@tufs.ac.jp

どうぞよろしくお願いたします。

(山口昭彦)

韓国中東学会に参加して

2008年12月6日に韓国中東学会の年次大会が開催された。これまで韓国中東学会とは相互に密な関係を維持し、会員間の交流が進められてきたが、例年のように日本中東学会から韓国中東学会年次大会への参加が勧められたことから、広く会員に希望を募った結果、私市正年会長、山尾大会員、吉岡明子会員が参加することとなった。以下はその参加記である。

「韓国中東学会」年次大会に参加して —研究会とハンリュウおもてなし—

2008年12月5日(金)～6日(土)Hanyang大学にて「韓国中東学会」年次大会が開催された。私は韓国中東学会の招待を受け、大会に参加するとともに研究報告を行った。以下に大会の概要と印象を記してみたい。

総合タイトルは、The Middle East-Korea: For More Concrete Mutual Understanding Based on Sustainable Cultural Cooperationであった。研究報告は6日(金)の1日だけであった。6日の午前中は、韓国中東学会会長のLee Hee Soo氏の歓迎挨拶の後、日本中東学会会長(私市)、中国中東学会会長(Choi Chang Mo氏)らの挨拶が行われた。残念ながらモンゴル中東学会からの出席者はいなかった。

続いて「中東と韓国」という総合パネル・セッションがくまれ、Cezmi Eraslan氏(イスタンブール大学)「オスマン帝国のマイノリティ政策」、Daryoosh Akbarzadeh氏(イラン国立博物館)「中世ペルシア語写本の中の 코리아」、Chang Byung Ock氏(HUFS)「韓国における中東・イスラーム研究の現状」、私市正年(上智大学)「アルジェリアのイスラーム運動の成長と挫折」の各研究報告があった。これらはすべて英語で報告された。

午後からは、平行して二つのパネル・セッションが組まれた。「中東の政治・経

済・歴史」部会は、Abdelmaksoud Abdelhamid 氏(エジプト、アズハル大学)がアラビア語で発表(「マムルーク朝下のエジプトとシリアにおけるモンゴルの要素の影響」)した以外は、韓国の研究者によるハングル語での発表、質疑がなされた。「平和と共存」部会には日本から吉岡明子氏(日本エネルギー経済研究所)と山尾大氏(京都大学)が参加し、報告を行った。報告予定の韓国の研究者がキャンセルしたため結果的に日本人二人の発表だけになってしまった。吉岡氏は「イラク戦争後のアラブ諸国とイラクの冷めた外交関係」を論じ、山尾氏は「イラク、サッダーム・フセイン体制下でのシーア派勢力の密かな急成長」を論じた。どちらも実証と理論を兼ね備えた発表で非常に高い評価を受けていた。この部会は英語で報告と質疑がなされた。他の報告では、Lee In Sook 氏の「アルベール・カミュとアルジェリア」が個人的には興味深かった。

全体的な印象としては、午前の総合セッションでの発表を除くと、発表数が8本と非常に少なかったこと、また若い大学院生の報告が少なく、議論がやや不活発であったことが気になった。後者の点について会長の Lee Hee Soo 氏に伺ったところ、中東研究を志しても大学等、研究機関に就職することが難しいため、大学院生で中東研究コースに進む者が減っているとのことであった。

また、大会全体の活気がやや欠けている点については、韓国経済の急降下(とくにウォンの価値下落)のため、助成金が集まらず、大会運営に支障をきたしたとのことであった。街中に出かけてみても、かつては満席で空席待ちを余儀なくされたレストランががらがらの入りという状況であり、韓国経済の低調が大会の活気にも悪影響を与えていたように思える。

しかしながら、ソウル到着から出発まで、ハンヤン大学の学生が木目細かなアテンドをしてくださり、また6日の歓迎「夕食会」ではおいしい韓国料理と民族音楽で会場は盛り上がった。Lee Hee Soo 韓国中東学会会長、および学生の皆さんのホスピタリティに心より感謝申し上げます。(会長・私市正年)

充実のセッションと人的交流

報告者は、2008年12月5～6日、韓国の首都ソウル郊外のハンヤン大学(Hanyang University)のアンサン・キャンパスで開催された韓国中東学会に参加する機会を得た。本会議の統一テーマは、The Middle East-Korea: For More Concrete Mutual Understanding Based on Sustainable Cultural Cooperation であった。そこで、報告者は、The Hidden Surge of the Shi'ite Authority in Iraq: A Social Movement of the Second al-Sadr in the 1990s というタイトルで報告を行った。

ソウルのインチョン国際空港に到着した時から、韓国中東学会は始まっていた。まず、感銘を受けたのは、韓国中東学会関係者、とりわけ本年度のホスト校であるハ

ンヤン大学の先生方、および学生の、細やかで温かい歓迎であった。出迎えから宿泊施設、大学施設の利用、キャンパス周辺の案内まで、まさに、至れり尽くせりである。

ハンヤン大学のアンサン・キャンパスは、ソウルから地下鉄で 1 時間ほどの郊外に位置し、サムソンや LG など、韓国を代表する企業に卒業生を輩出する、いわゆる理系が強い大学である。当校は、韓国中東学会の会長で、非常に饒舌かつ紳士なリー・ヒー・スー先生が教鞭をとる大学でもある。中東研究に携わる関係者が所属するのは、文化人類学部で、考古学から歴史学、地域研究、文学、言語学、政治学にいたるまで、同学部に含まれるという。とにかく巨大なキャンパスを持つ、私立大学である。

本会議には、我々日本中東学会からの出席に者の他に、イランの国立博物館の研究者、エジプトのアズハル大学の教授、トルコのイスタンブール大学の教授などが招待されていた。

学会自体は、韓国、日本などの中東学会の会長らの基調講演から始まり、イランなどからの招待者によるパネル・ディスカッション、その後、三つのパネルを経て、総会と懇親会で締めくくられた。いずれのパネルも、韓国内外の研究者が参加しており、国際色豊かなものになった。ディスカッションも極めて活発になされ、様々なテーマに対する出席者の関心の高さが見受けられた。

報告者自身のパネルでは、吉岡氏と報告者が現代イラクの政治を扱った報告を行った。報告に対して、韓国中東学会を代表する気鋭の中堅政治学者を中心とするディスカッサントから活発な質問と、有益なコメントを頂いた。国際学会で報告するという経験もさることながら、今後の研究の発展にとって、極めて益の多いディスカッションができたことは、この上なく大きな収穫であった。

今回の韓国中東学会への参加で最も心に残ったのは、人々との交流であった。ハンヤン大学滞在中に、韓国の中東研究者、大学院生、学部の学生など、とても多くの人たちと交流することができた。リー韓国中東学会会長は、ご多忙のなか、初日から、報告者を含む若い参加者のために、ハンヤン大学の院生たちとディナー後の懇親会を設けてくださった。この人的な繋がりこそが、中東研究を進めるうえで、将来大きな糧となるに違いない。

シベリアからの寒気が吹き込む極寒の韓国。それでも、宿のオンドルと、温かい大学施設と、熱い韓国料理、そして何よりも丁重に迎えてくれた関係者の温かさが心にしみる年次大会であった。関係緒氏に心から感謝の意を表明したい。（山尾大）

アットホームな雰囲気

この度、2008 年 12 月 6 日に開催された韓国中東学会の国際大会に参加する機会を頂戴した。日本からの参加者が会長の私市先生を含めて 3 名と少数であったことは、参加の呼びかけが開催予定日のわずか 1 ヶ月前とややショートノーティス

であったことと関連していたと思うが、事情は韓国側も同様と見えて、慌ただしく決まったらしい今回の大会の参加者は、総勢でも30名弱と小規模なものであった。日本勢3名の報告は現代政治に集中していたが、その他、中東からKAMESに招待された外国人研究者や、韓国の研究者の報告は、それぞれ研究対象のテーマも時代も様々であった。

私が報告をさせて頂いた午後のセッションは2つのパネルに分かれ、報告者は山尾氏と私の2人だけであった。それ故に多くの時間を頂戴することができ、アットホームな雰囲気の中、ディスカッサントの3名の先生を中心にコメント、質問を多々頂くことができたことには、とりわけ感謝したい。

日本を出発する前は、開催場所が漢陽大学の安山キャンパスである、というくらい情報しかなく、宿泊先も大会のスケジュールも、果ては大会開催日すらよくわからないまま、一抹の不安を抱えた出発となった(ちなみに私は大会日程を2日間だと思っていたが、イランからの参加者は3日間と聞いていたらしい。実際には大会は1日だった)。しかし、着いてみれば空港には日本語が堪能な学生が迎えに来てくれており、滞在中、何から何まで世話を焼いてくれた。日本語の堪能な学生が随分多いことにも、また、平仮名や片仮名の読み方を知っている韓国人のビジネスマンや学者が少なくないことにも驚かされた。日本から見た韓国よりも、韓国からみた日本の方が身近な存在であるらしい。いつも中東ばかりを見ていたが、今回は身近な外国を再認識させてもらえるとても新鮮な機会となった。

こうした機会を与えて下さった、私市先生始め日本中東学会の諸先生方、そして漢陽大学のボランティアの学生さんたちと、国外からの参加者を手厚くもてなしてくれた韓国中東学会会長の李先生に、この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

(吉岡明子)

地域研究学会連絡協議会 2008 年総会報告

去る2008年11月22日、東京大学本郷キャンパスにて地域研究学会連絡協議会の2008年総会が行われました。日本中東学会からは事務局を担当する筆者(大稔哲也)が参加し、事務局側として総会の運営と報告全般を担当しました。そもそも、なぜ筆者らがこのような立場におかれているのか訝しがる向きもあるかと思われるので、一言説明させていただきます。JAMESニューズレター113号に大塚和夫前事務局長が縷述したように、2003年の同協議会設立には日本中東学会も深くかかわっており、その後も幹事学会として運営に貢献してきました。さらに、2007年度前からの既定路線として、2007年秋から2年間は日本中東学会がその事務局を担当することになっておりました。そこで、日本中東学会理事のうち、渉外担当である大塚と大稔が事務局を担ってまいりました。

同協議会は、日本学術会議の協力学術研究団体に登録されており、現在は日本学術会議の地域研究委員会を様々な側面からサポートすることを要務ととらえています。また、地域研究に関連する“学協会”(この点が、一見類似する「地域研究コンソーシアム」と大きく異なります)が情報を共有したり意見交換したりする磁場を形成してきました。さらに、カイロ・ナイロビ学振センターの存続要望書の提出など、地域研究をめぐる研究環境の整備と維持のために共同活動の取りまとめを行っています(詳細については、協議会のホームページ《<http://www.jcas.jp/asjcasa/index-j.html>》をご覧ください)。

では、本年度の総会内容ですが、まず事務局(大稔)側から活動報告がなされました。ニューズレター第2号の刊行と第3号の編集作業、日本学術会議地域研究委員会・地域研究基盤整備分科会の報告へ向けた検討会の開催、日本学術振興会カイロ・ナイロビ研究連絡センターをめぐる要望書の取りまとめと関係機関への提出、学会誌の遡及電子化についてなどです。同じく事務局からの会計報告の後、日本学術会議地域研究委員会の側から参加された油井大三郎氏が、協議会の協力に対して謝意を述べると共に、詳細な資料をもとに報告しました。

次いで審議事項としては、事務局長の交代が最大の案件でした。これは大塚前事務局長が体調を崩したためであり、結局、参加諸学会からの要請で大稔が今後は事務局長を務めざるを得なくなりました。この辺り、今後の日本中東学会側からのバックアップ体制も再考を要しましょう。さらに、今後の事業展開、幹事学会の役割、法人化などをめぐって審議がなされました。

さて現在、協議会によるニューズレター第3号編集作業は最終段階にあります。日本中東学会事務局のご協力を改めて乞う次第です。また、中東学会会員の皆様に関連する情報も多く含まれていると思われまますので、是非、皆様にもご笑覧いただければ幸いです。ニューズレターは上記のホームページからダウンロードできます。

では、今後とも協議会の活動と日本中東学会の協力についてご理解とご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。
(大稔哲也)

近代史家ラウーフ・アッバースの逝去を悼む

エジプトの歴史家ラウーフ・アッバース・ハーミド博士(1939.8.24~2008.6.26)は、彼の卓越した業績によって記念されるだけでなく、日本における中東研究の歴史のなかでも忘れてはならない存在である。

彼は、カイロ大学文学部歴史学科において、彼を招いたムハンマド・アニス教授のもとで、またそのあとを継いで、40年ものながい期間、近代史の教育・研究に携わった。1983~89年には歴史学科長をつとめたが、それは彼の見識の広さと声望の高さを物語る。96~99年には大学院教育担当副学部長として、大学の改革

に尽力した。99 年以降、彼はエジプト歴史学会の会長として、終生エジプトの歴史学を代表する立場にあった。カイロ大文学部には彼の名を冠した教室が生まれる。

ラウーフ・アッバース教授の著作・論文は、エジプトの社会労働運動史、社会経済史、近代政治思想史などの諸領域に概括される幅広いもので、以下のような仕事に代表される。1952-1899 مصر في الحركة العمالية في مصر ([エジプトにおける労働運動 1899-1952] 1967). النظام الاجتماعي في مصر في ظل الملكيات الزراعية الكبيرة. ([大土地所有制下のエジプト社会制度] 1973). مذكرات محمد فريد: دراسة و تحقيق. ([ムハンマド・ファリード回想録・研究と校訂] 1975). جماعة النهضة القومية. ([民族覚醒グループ] 1985). أوراق هنري. ([ヘンリ・クリエル文書とエジプト共産主義運動] 1988). كبار الملاكين و الفلاحين في مصر 1837-1952. ([エジプトにおける大地主と農民 1837-1952] 1998). آسويم・ديسوكي و آسويم・ديسوكي و آسويم・ديسوكي (共著). など。

彼は日本の「近代化」との比較という視角をつよく自覚していた。事実、*Rural Gentry in the Nineteenth Century Japan and Egypt, a Comparative Study*, Tokyo (IDE), 1974, *عصر مايجي في المجتمع الياباني* [明治期日本社会] 1980 のほか、立憲運動史・知性史・政治発展論など日本研究の仕事も多々ある(彼が『歴史学研究』No.607 [1990.6] に寄稿した「エジプトにおける日本近代史研究」で紹介されている)。それらは1970年代を中心に80年代にかけて、アジア経済研究所やアジア・アフリカ言語文化研究所に来訪研究者として累次滞在し、日本の研究者との共同研究をつうじて生み出された果実である。エジプトに留学した日本人研究者には、彼から親身の指導や助言を受けた人も多くいたことだろう。彼の日本傾倒は、蜂谷道彦『ヒロシマ日記』を(英訳を手がかりに) *يوميات هيروشيما* (1977) としてアラビア語に翻訳したことにも示されている。

彼は政治には関わらなかったが、鋭く批判的な社会的観察眼をもって世界も中東も日本もその動向を洞察しており、それに基づいて、ユーモアを交えつつ研究者として誠実・厳格に身を処すことを誤らなかった。日本人の中東に対する姿勢について、また日本の中東研究についても、きびしく問題点を見抜いていた。彼がネッリー・ハンナと組んで共編した *Society and Economy in Egypt and the Eastern Mediterranean 1600-1900*, Cairo, 2005 で、歴史家アンドレ・レイモンを記念する序文には、彼の立場が暗示されている。

私は、1966年カイロはドッキーのムハンマド・アニス邸で、自分の論文への講評を聞きにやって来たアイン・シャムス大学出身のラウーフを紹介され、はじめて会った。それから後、三年前のカイロでの一夕の歓談まで、さまざまな情景が走馬灯のように思い浮かぶ。だが、1970年代半ば大事な一人息子ハーティム同伴のラウーフ夫妻が信州白馬村での若手研究者らの夏の合宿に参加してくれて、兎とクズバラの探索からはじまる本格モルーヘイ料理を楽しんだときの顛末が、なぜか不思議に鮮明な思い出となってよみがえる。合掌

※本稿作成にあたり、イサーム・ハムザ、栗田禎子両氏の協力を得たことを記し、感謝する。
(板垣雄三)

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。これらの会員の連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただけますでしょうか。

伊藤 祥子	江崎 智絵	柏原 弘明	片山 能輔	唐鎌 圭彦
河井 知子	岸 真由美	木下 宗篤	黒田 努	杉田 聖子
瀬戸 邦弘	高木 小苗	高橋 陽子	高堀 英樹	武田 朝子
中川 喜与志	中村 明日香	西田 今日子	畑中 美樹	南川 亜樹子
森広 泰平	安永 真理	山中 啓介	吉田 行香	依田 純和
和賀 えり子	渡辺 正志	Ahmed Mohammed Kandil	Ahmed Naili	
Ali Abdullah Alkahtani	Ali El-Shazly	Hanan A. Kholoussy		
Khan Muhammad Azhar	Modjtaba Sadria	Mohammad Abdullah Sahar		
Rochmat Saefur	Samy Mohamad Soliman Ahmad	Seong Min Hong		

会員の異動

【新入会員】

諫早 庸一

今井 静

篠田 知暁

沖田 由佳子

鴨野 洋一郎

杉山 佳子

千葉 悠志

辻 明日香

栃堀 木綿子

中村 満次郎

浜本 一典

藤波 伸嘉

役重 善洋

Sevilay Zehra
Aksoy

Jang Daegy

【所属先・連絡先の訂正・変更】

栗倉 宏子

飯野 りさ
五十嵐 大介

池田 有日子

石黒 大岳
奥 美穂子
小澤 一郎
片倉 邦雄
片倉 もとこ

兼川 千春
栗山 保之
黒田 安昌

小村 明子

坂井 定雄
佐々木 紳
澤江 史子

柴田 英知

嶋尾 孔仁子
清水 理恵
下山 伴子

縄田 浩志

根本 和子

野元 晋

橋爪 烈

細谷 幸子

前田 君江

前田 弘毅

宮治 一雄

若松 大樹

El-Mostafa Rezrazi

Rateb Muzafary

Saleh Adel

Amin

【2007年度末をもつての退会者(追加分)】

市原美奈子／伊藤治夫／奥野英樹／森下信子／Zoya Abdul Latif Dawoud

寄贈図書

【単行本】

中村満次郎『イスラームの秘密——預言者ムハンマドの啓示と人生』悠飛社、2001年。

『イランのシーア派イスラーム学教科書——イラン高校国定宗教教科書』富田健次訳、明石書店、2008年。

『第1回国際シンポジウム報告集』大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト、2008年。

- 『CISMOR 国際ワークショップ 2007 イスラームと西洋——アメリカの外交思想を検証する』同志社大学 21 世紀 COE プログラム・一神教学際研究センター、2008 年。
- Bukhary Essam Amanallah, *Indigenous Technological Innovation Capability Building in Saudi Arabia: Current Situation Analysis and Proposal System Design for Realization* (『サウジアラビア 国産技術のイノベーション能力構築』) Japan-Saudi Arabia Society, 2008.
- Kubaseck Christopher & Günter Seufert, *Deutsche Wissenschaftler im türkischen Exil: Die Wissenschaftsmigration in die Türkei 1933-1945*, Würzburg: Ergon Verlag, 2008.
- Miyagi Yukiko, *Japan's Middle East Security Policy: Theory and Cases*, Sheffield Centre for Japanese Studies/ Routledge Series, London: Routledge, 2008.
- Nagasawa Eiji and Ikeda Misako, *A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt*, CD-ROM, The Toyo Bunko, 2007.

【逐次刊行物】

- 『アラブ・イスラーム研究』6 号、関西アラブ研究会、2008 年。
- 『季刊アラブ』127 号、日本アラブ協会、2008 年。
- 『現代の中東』46 号、アジア経済研究所、2009 年。
- 『東方學會報』95 号、東方学会、2008 年。
- 『dānah——日本クウェイト協会報』220 号、日本クウェイト協会、2008 年。
- 『NII Today』42 号、国立情報学研究所、2008 年。
- Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, vol. 61 no. 1-2, Akadémiai Kiadó, 2008.
- Bulletin of the School of Oriental & African Studies*, vol. 71 no. 3, School of Oriental & African Studies (SOAS), London, 2008.
- Journal of the American Research Center in Egypt*, vol. 42, the American Research Center in Egypt (ARCE), 2008.
- Newsletter*, no. 76, Research Centre for Islamic History, Art and Culture (IRCICA), Organisation of the Islamic Conference (OIC), Istanbul, 2008.
- Prilozi za orijentalnu filologiju*, vol. 57, Orijentalni Institut u Sarajevu, 2008.
- The Iranian Journal of International Affairs*, vol. 20 no. 1, Institute for Political and International Studies (IPIS), Tehran, 2007-08.
- The Iranian Journal of International Affairs*, vol. 20 no. 2, IPIS, Tehran, 2008.
- The Iranian Journal of International Affairs*, vol. 20 no. 3, IPIS, Tehran, 2008.

事務局より

いよいよ今期の事務局の活動も大詰めですが、まだまだ重要な仕事は残っており、気を引き締めて取り組んでいきますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。

先の評議員選挙では、投票用紙の再送という事態に至ってしまい、会員の皆様にはご迷惑をおかけしました。正しい投票用紙のひな形を選挙管理委員会が確認していたのに、印刷と発送を引き受けた事務局の側で、廃棄予定のミスプリントを混入してしまいました。混入が判明した時点での選挙管理委員会の迅速な対応に感謝するとともに、同様の事態が二度と生じないよう、選挙管理の方法について、選挙管理委員会と理事会で検討の上、次期に申し送りますので、よろしくご寛恕願いたく存じます。

今号のニューズレターは封入物にご注意ください。「第 25 回年次大会参加申し込み等について」で述べられているように、すべての会員に年次大会参加費の振り込み用紙が、加えて一部の会員の方には、会員データ照会調査票や学会年会費の振り込み用紙が同封されています。

調査票は、今号の発行にあわせて実施する会員調査に使用します。今期は、電子メールを使って学会に登録された会員の情報を個別にお知らせし、電子メールでご回答いただく方式を導入しますが、学会にメールアドレスの登録がない会員の方には、ニューズレターに調査票を同封しております。いずれの方法によるのであれ、会員データベースを更新し、2009年度に新しい名簿を作成するために必要ですので、より整った名簿やデータベースが作成できるよう、登録情報に修正の必要がある方は、適宜の方法で事務局までご連絡いただければ幸いです。

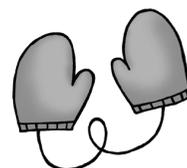
また、会費についてもうっかり収め忘れておられる方がおられましたら、同封の振り込み用紙を使うなどして、ぜひとも年度末までに納入をお願いいたします。会費前納制による 2009 年度会費の納入率は、全会員が納入した場合の総額を母数とすると、1月31日時点で58.4%に留まっております。会員数で言えば、716名の会員のうち会費に未納のある会員は304名(42.5%)になります。学会活動の経費が主として会員から寄せられる会費によってまかなわれていることを考えると、このままでは学会が正常な活動を継続するのに支障を来すことが危ぶまれます。無粋な話で恐縮ではありますが、学会と日本の中東研究が現状を維持するだけでなく、ますます発展していけるようご高配いただきたく存じます。

お詫びとお願いばかりになってしまいましたが・・・。

(赤堀雅幸)

編集後記

年末から続いたガザ攻撃について、関心を持った学会員も大勢いらっしゃるだろうと、各地のティーチインなどの記事が掲載できるかどうか検討したのですが、今号では無理だと判断しました。評議員選挙・理事選挙についても、記事は次号掲載となりますのでご了解ください。また、アラビア語スクリプトが使いやすくなった状況に鑑み、転写をせずにアラビア語の書名を誌面に組み込む記事



を作りました。激動の世界情勢・学界動向のなか、ささやかな変化といったところ・・・!? 任期は残り少なくなりましたが、本年もよろしく願い申し上げます。

(山岸智子)

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2009年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMESに未送付分がある場合は、2008年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。なお、請求会費額は2009年1月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第116号

発行日 2009年2月10日

発行所 日本中東学会事務局

印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学アジア文化研究所気付

Tel & Fax: 03-3238-3693

Eメール: james@db3.so-net.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>

郵便振替口座: 00140-0-161096 (日本中東学会)

銀行口座: 三井住友銀行渋谷支店(普) 5346808

(日本中東学会 代表 私市 正年)

ゆうちょ銀行口座: 〇一九店(当) 0161096

(ニホンチュウトウガクカイ)